

令和元年度

病虫害発生予察特殊報 第 1 号

令和元年 5 月 20 日

茨城県病虫害防除所

TEL : 0299-45-8200

ネギハモグリバエの別系統の発生について

害虫名：ネギハモグリバエ別系統
学名：*Liriomyza chinensis* Kato
発生作物：ネギ

1. 発生確認の経過及び県外での発生状況

- (1) 平成 30 年 10 月に、ハモグリバエ類により秋冬ネギの葉組織が食い尽くされ白化する被害が県内ネギ圃場において発生した。その後、茨城県農業総合センター園芸研究所が被害株から得られた羽化個体について検鏡およびミトコンドリア CO I 領域の塩基配列を解析するとともに、(国研)農業・食品産業技術総合研究機構 東北農業研究センター所蔵の塩基配列データ(上杉・徳丸, 2019 応動昆大会)を用いて比較検討を行った結果、当該個体は、従来の塩基配列(以下、A 系統と略記)とは異なる塩基配列を持つネギハモグリバエ(京都府及び富山県で確認された系統と同じ系統)として同定された(以下、B 系統と略記)。
- (2) 国内における B 系統の発生は、平成 28 年頃より京都府で、平成 29 年頃より富山県で発生が確認されており、平成 31 年 3 月に京都府から特殊報が発表されている。

2. 形態の特徴

ネギハモグリバエ A 系統および B 系統とは、形態による識別は困難である。両系統とも成虫の体長は約 2mm であり、胸部と腹部が黒く、その他の部分は淡黄色である。幼虫はうじ虫状で、成長すると体長約 4mm に達する。蛹は体長約 3mm の褐色、俵状である。

3. 生態の特徴

両系統とも成虫は葉の組織内に産卵し、孵化した幼虫は葉の内部に潜り込んで葉肉を食害する。幼虫は成長すると葉から脱出し、地表または土中で蛹となる。

4. 被害の特徴

B 系統は、一葉あたりに複数頭の幼虫が葉の内部に潜り込んで集中的に葉肉を食害する。A 系統と比較して、1 葉あたりの幼虫数が多い傾向がある。B 系統の初期の食害痕は、従来の A 系統と同様で、不規則な白線状であるが、進展すると近接した食害痕同士が癒合し、葉全体に及び、葉が白化したようになる(写真 1)。葉肉が食い尽くされて、表皮が浮いた状態になり、表皮を剥離すると、多数の幼虫が確認される(写真 2)。

5. 防除対策

- (1) 発生を認めたら、下表を参考にして、ネギハモグリバエに適用のある薬剤により、発生初期の

防除を徹底する。

- (2) 被害葉及び収穫残さは本種の発生源となるので、残さは圃場内に放置せず、一カ所にまとめて積み上げ、ビニール等で覆い、裾部分を土で埋める等適切に処分する。

表 ネギのネギハモグリバエ防除に使用できる主な農薬（平成31年4月10日現在）

薬剤名	希釈倍数 ・使用量	使用方法	使用時期	有効成分	IRAC コード*
ベストガード粒剤	5g/培土リットル	育苗培土混和	は種時	ニテンピラム	4A
	6kg/10a	植溝処理土壌混和	定植時		
	6kg/10a	株元処理	収穫前日まで		
ベリマーク SC	400 倍	灌注	育苗期後半～定植当日	シアントラニリプロール	28
	2000 倍	株元灌注	収穫7日前まで		
アルパリン顆粒水溶剤/ スタークル顆粒水溶剤	50 倍	灌注	定植前日～定植時	ジノテフラン	4A
カスケード乳剤	4000 倍	散布	収穫14日前まで	フルフェノクスロン	15
アフーム乳剤	1000 倍	散布	収穫7日前まで	エマメクチン安息香酸塩	6
リーフガード顆粒水和剤	1500 倍	散布	収穫7日前まで	チオシクラム	14
アクタラ顆粒水溶剤	1000～2000 倍	散布	収穫3日前まで	チアメトキサム	4A
アグリメック	500～1000 倍	散布	収穫3日前まで	アバメクチン	6
ディアナ SC	2500～5000 倍	散布	収穫前日まで	スピネトラム	5



写真1 食害痕により、白化したネギ葉

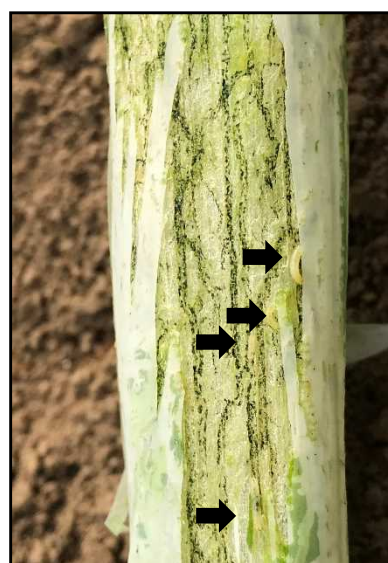


写真2 表皮を剥離した時の被害部の様子
(矢印は幼虫を示す)